

至を詠した工布壹布が、「即ち高低、進出曲湾、折角美妙は言辞を以て盡く詮表すること難きが故に、工力をつくれ、よろしきに從いてその美妙を致すを合法とす」(逸見梅栄著、印度における礼拝像の研究)といつてゐるように造像の規定に從いながらも、最後は作者の創造力を働かして美しく作らねばならない。

事實現存する密教像を見ても思重に規定された儀軌図像に從つてゐるにもの、わらず、全く同一な作品を見出すことは出来ない。

仏教美術における図像は、観念的に想定されたものであつても、情趣性を持つものであり、又情趣性の考慮されない場合であつても、作者の能力に依りて芸術性を表はし得らるものである。思重な宗教的な規定が全く芸術性を無視するものではないことが知られる。

宋代に於ける日支交渉の性格

成田俊治

(一)

一般に我々が日支交渉に目を向ける時、その歴つた組織、そして華やかさで以て知られてゐる日清交通、日唐交通等の口家的交渉に先ず目を向けるであらう。そして之等の交渉の結果、我々の文化程度が高まつた事

は論をまたない。しかし、に考へなければならぬ事は、この様な口家的交渉の空隙を縫つて私的交渉のあつた事を忘れる事は出来ないのである。この意味に於て、公的交渉の他に私的交渉を考察する事も重要な事であつたと思ふのである。

表題に掲げた日宋交渉は、我々平安末期より鎌倉時代にわたる間の交渉であり、その交渉が私的交渉であつた事は、種々の歴史書に見られ、我々周知の如くであらう。(勿論その型としては消極的交渉から積極的交渉へと移行したのであつたが)

ではこの時代に於ける日支交渉が一体日支交渉史上如何なる地位にあり、且我々大衆生活上に如何なる影響を及ぼしたであらうか、この問に對して解明を施さんとするのが私の意圖した所である。

(二)

日宋交通は日清、日唐、日明交通の如く口家的交通ではなく、又重商主義的法令の下に次第に萎微して行つた江戸時代の受動的な日清交通ともその性質を異にしてゐるのである。しかし日宋交通と雖も初めは日明交通と同じく一定の制限の下に受動的な交通から出発したのであり、次第に政治的、社会的、経済的状況の進展に共になら漸次積極的気運が生じ來つたのである。即ち寛平六年五月唐の留学僧中瓊が唐朝の洞幣を伝へた書の到

着したのを契機として、管系通員の奏狀に基いて遼唐便の派遣が中止となつてから、北宋時代に於ける我口人の海外渡航は宏繁さ小、唯大陸より来航した外口商船に對しては小川を大宰府に寄置し、政府の管理下に貿易を許容すると云つ、極めて消極的受動的交通に墮してしまつたのである。従つてこの後は日本人として支那に渡る爲には支那の商船に便乗するより他に方法がなかつたのである。しかしながら南宋時代に入り、平清盛が北宋貿易を贊助した事や、武士階級の勃興と云う政治的、社会的變動が自己意識を強めた事により、我が口人の風尚が進取的となり、又宋朝が両口の交易を歡迎した事等の爲に彼我の交通が再び頻繁を加へ来つたのである。

以上の様な交渉の型は我口外來文化浸透の歴史の波である。南口と鎖口の波の上にのつていと云ひ得るのである。即ち外來異質文化が強烈、且多量の場合には同化が之に伴はない無批判的な外口文化崇拜の弊風が生じ遂に文化的自覺を失う事になるのである。この場合外來文化の輸入を制限、乃至は禁止する事によつて自己反省が起さ小て来るのである。そして、に精神の基礎に立つて外來文化を同化する事となるのである。そして再び自己反省力をほぐむと共に漸時能動的へと進展するのである。この様な波長の上に宋代交渉は

一種の鎖口状態として理想的な型を見出す事が出来るのである。

この事は次の事によつて理解されるのである。即ち前述の如く、遼唐便途の輸入した盛衰文化が我口文化向上に寄与した功績は充分認め得るのであるが、しかし同時に小川が極めて強烈であり、巨輸入量も多かつた爲、我貴族階級の中には無批判的な大陸文明憧憬と云つ、盲目的熱反省的風潮を導入した事は否定する事の出来ない事実である。即ち大江維時の日親東の序(朝野群載一)に表はしている遠物崇拜の心理は、大陸文明を攝取して貴族等の生活程度が高まれば高まる程海外の珍寶を欲する欲望が強くなつて来る事をいひ、又榮華物語(卷二)、今鏡(卷一)にすべて華美國風は唐を唐口の様に擬し、又字彙の源いことを誇る場合にまで大陸を標準としてゐるのである。

しかしながら唐末の動亂に次いで五代の混亂時代を至さし、も盛えた盛唐文化も地に落ち、新たに宋朝が起ると共に、こゝに大陸の政治的衰退を知り、小川により我口政治の比較的安全してゐる所以を自覺する様になると、遼唐便は廃止さ小、對大陸關係を積極的より消極的へと転換し、自己反省の機会を得、前時代輸入文化の同化に精進し、こゝに對支再認識による文化的自覺と、口民的意識が湧き上つて来たのである。丁度こ

の時代に興つた武士階級の勃興がこの自己意識を更に強烈にしたのであり、この自己意識に立脚して日本的なる鎌倉文化が確立されたのである。

以上の如く、宋代に於ける交渉は、交渉史上理想的なる型を示し、更に我口固有文化確立の画期的な役割を果してゐるのである。

(三)

以上日宋交渉の日支交渉史上に於ける地位は明らかとなつた。では次に考へなければならぬ事は、この交渉の結果我口大衆生活に如何なる影響を及ぼしたであらうか、それについてはまず宋の商船で私的に入宋した人々は一体如何なる人々であらうかと云う事を考察しなければならぬ。即ちそれは何等政治的、物質的な性質を含んでゐるものでなければならなかつた。この制限にこう束されないものは僧侶であつた。即ち僧侶達の入宋目的は、後述するが單なる精神的な慰安、宗教的な要求を満たす爲の入宋で政治的、物質的な意図は何ものもなかつたのである。この様に入宋の人的要素が僧侶であると云う事は、当然我口に精神的宗教的影響を与へたと云ひ得るのである。

さて、入宋僧侶中最も有名なものの名は多くの書物で知られてゐる如く、曾然、寂然、成尋、重兼等が挙げられるのであるが之等の人々が公的文書の廃止さ

れた時代に如何なる目的で入宋したのであらうか、曾然の入宋の目的は、

本朝文粹十卷の彼が入宋の際母の修長の爲に作つた頌文を見ると、

「我是曰本口無才無行一羊僧、爲求法不末、爲修行即末也」

と云つてゐる如く、大陸に於ける仏教の聖地に修行、参拜を主要目的とし、特に

「曾然願先参五台山、欲逢文殊之即身」(中略)但我是罪障之身(中略)修行是勤、罪根漸滅」

の文によつて窺はれる如く、五台山に巡礼し、この山に示現すと云う文殊菩薩を拜し、自己の罪障消滅を願う事がその目的であつたのである。

ではこの目的を有くんだ所の社会的状況はどの様であつたであらうか

平安時代の仏教は云う迄もなく貴族仏教であり、苦学的形式に走り一般民衆には理解し難く、且当時の政界の影響により、宗教界僧侶階級に迄門閥的弊害が移つた爲、ますます民衆から遠のくと共に僧侶階級自身も混乱を来したのである。こゝに眞に宗教的信仰を求めてゐる者は必然的に既成宗教より遊離して行くと共に新宗教を興さなければならなかつたのである。この必然性の上に平安末期頃より起つた末法の畏怖観念

と浄土の救済觀念の二つと合致し、こゝに新宗教發生の素因が見出されるのである。末法思想が深まるにつれて、いはゆる正法衰滅し、行証も又失はれ行く時代に遭遇した一般民衆の不安な心は必然的に三身の思想平等慈悲の性格、絶対智慧の人格、三世永却の存在を要求するのであり、この要求を満し得る信仰の対象は菩薩であり、特に大陸に高まりつつあつた五台山の文殊示現説が我口僧侶に対して強い魅力を有していたのである。結局末法の世に生じ正法に合ひ難いが故に、文殊菩薩の常住示現の地を巡礼して罪障消滅を祈り、末世は阿彌陀仏の極樂浄土に往生しようと希求したのである。この様な社会一般の要請、要求により入宋した僧侶は、五台山文殊菩薩の信仰を我口に移植しようとしたのである。彼の奮然はその一端として、嵯峨一帯の五台峯を五台山に準じて一般の信仰を集めたのである。そしてこの入宋巡礼僧侶によつて輸入された、普遍化した五台山文殊菩薩に對する信仰は單に五台山信仰に於て終結したのではなくそれが外面の方面と、内面的方面へと展開して行つたのである。

その外面の方面への展開は尙然がその入宋目的の中に述べている様に五台山巡礼を終へたら、更に中天竺に到達して釈迦の聖蹟へも参れしようと云う意圖が表はれてゐるのである。そして悲觀的な末法思想は時代を

下ると共にいよいよはげしく五濁末世の層層欣淨の思想はやがて印度の教祖の偉業を追慕する念を深め、こゝに平安末期より仏舍利に對する崇拜が高まり、日本紀略にある京畿七道の神社に仏舍利を奉納した事や、又舍利講、或は僧侶四の仏舍利偽造者追現はれた事を窺ても知られるのである。

次に内面的方面としては、当時印度巡礼は不可能であり、又五台山も少數の僧侶のみで、その巡礼は容易な事ではなかつた。まして一般民衆にとつては五台山巡礼でとゞいて實現の可能性は非常に少いのである。従つてこゝに彼等の満たされざる感情は他のものによつて補はなければならなかつたのである。こゝに我口觀音信仰巡礼が起つたのである。その過程として東山性基は既に印度の教祖の偉業を仰ぎ、印度の聖蹟に憧れ、更に転じて大陸五台山に思慕の情を通じた人々が自口の教祖聖徳太子の偉業を徳配のは當然の帰結であると云つてゐる。そして太子に對する追慕の思想が平安末期より起つて来たのである。殊に太子を求世觀音の化身とする思想は、末法の不安時代に於て時代的要素とも云ひ得るのである。そしてこの觀音菩薩の信仰はやがて文殊菩薩の信仰に包攝せらるべきものである。この様にして五台山文殊示現に代つて置かれたのが觀音示現であり、末法思想の深刻化の結果、觀音の力を借

りて阿弥淨土に往生しようと云う観念を生じ、観音
示現説は益々盛んとなつたのである。盛んになるにつ
いて、各地に示現の説が起り、中右記には、寛治三年
近江の彦根寺の観音がこの年靈應を現はしたと云ひ、
栗原被抄には観音驗する所として、清水、石山、長谷、妙
彦根寺、六角堂を挙げ、室物集には、四天王寺、熊野北嶺の
曰岳山王八王子穴生、成相、金前、新河を数へている。
この様に各地に観音靈驗が現はれると、之等の靈驗所
に巡拝する事が流行して来たのである。そして観音二
十三身に擬した三十三靈驗所もその山と共に現れ出た
のである。即ち千載集の叙教部にある前大僧正覺忠の
歌に

「三十三所の観音をかみ牽らむとて、所々まぬり侍り
ける時、美濃の谷汲にて、油の出づるを見てよみ侍
りける」

とあるを見て、既に平安末期より三十三所が現れ巡拝
したと考へられるのである。

そして、に平等無差別の概念をもつ観音菩薩は今や
貴賤一般に容易に信仰され、今昔物語、撰集抄、室物
集、沙石集等には、青侍、田舎武士、女房百姓、乞食に至る
迄観音を信仰し、又靈驗説話が見出されるのである。

この事は、新宗教への過渡的性質を含むものであり
之實に日宋交渉の入京巡礼僧のもたらした新宗教的影

響と云ひ得るのである。

以上、結局宋代に於ける交渉は、その理想的なる交
渉の型に於て、文化的自覚と、口民的意識を生み出し
それにより立脚して出来たのが鎌倉文化であり、更に又宗
教面に於て、大陸の五台山信仰が我が宗教生活との固
に内在的関連を生じ、五台山信仰と、我が観音信仰と
の間に包摂關係が成立し、いはゆる靈驗所が各地に勃
興して巡礼なる宗教的儀礼が流行する様になつたので
ある。之實に宋代交渉の結果と云うべきである。